

聖書：ローマ 16：1～16

説教題：すべての聖徒たちによろしく

日時：2016年9月25日（朝拝）

ローマ書の最後の章となりました。パウロはここでローマの教会への挨拶を記しています。仕方ないのですが、こういう場合、私たちの前に並ぶのは、私たち日本人には発音するのも難しいカタカナの名前の羅列です。その意味に至ってはさらにチンプンカンプン。この手紙の受取人たちにとっては最も興味深いところでしょう。そこに生きている具体的な人々の名前があげられるのですし、この私にパウロ先生は何と言ってくれるのか、と。たとえば「阿部大によろしく」と書いてあった時のことを考えてみれば分かります。あるいは今日の週報にお名前が載っている方々のお名前を拝借すれば、「キリスト・イエスにあって私の同労者である〇〇によろしく」とか、「キリストにあって練達した〇〇によろしく」とか「主にあって私の愛する〇〇によろしく」等々……。こうすると俄然、この箇所は生き生きとして来て、眠っている場合ではなくなります。これまで見て来たこの手紙のメッセージもメッセージですが、この挨拶も挨拶です。その一言一句が心にしみます。しかしその一人一人についてほとんど分からない今日の私たちにとってはつまらない箇所に見えてしまう。ローマ書はもう終わった！と言って、さっさとこの書を閉じたくもなります。似たような箇所として新約聖書の一番最初の章、マタイの福音書冒頭の系図もそうでしょう。最初の2～3行くらいは忍耐してカタカナの文字を目で追いますが、後は面倒になって、そのリストが終わるあたりまでスーッとワープする人が多いのではないのでしょうか。しかしマタイ1章の系図がそうであるように、一見無味乾燥と思われる名前のリストにも黄金の宝は隠されているものです。このローマ書16章も少し忍耐して思い巡らすなら、こういう箇所だからかえって浮かび上がって来る当時の教会の生き生きとした姿を私たちは見て取れるのではないのでしょうか。

まずこの挨拶の言葉から分かることは、パウロとローマのクリスチャンたちとの間にあった親しい交わりについてです。ある人は、なぜパウロはまだローマの教会を訪れたことがないのに、こんなに多くのクリスチャンたちを知っていたのかと問います。そしてこの部分は本当は別の教会に送られたものであったが、後に間違っこのローマ書にくっ付けられたのではないかとさえ言います。しかしそのように見る必要はありません。パウロが何人かのローマのクリスチャンたちをすでに知っている理由の一つとして、使徒の働き18章に記されているローマ皇帝クラウデオ帝によるユダヤ人のローマ退去命

令があります。紀元 49 年のことですが、その命令によってローマに住んでいたユダヤ人は一斉にその町から追い出されました。その中にはここに出て来るプリスカとアクラの夫妻も含まれていました。パウロはこの夫婦とコリントで出会い、彼らからローマの教会の様子を色々聞いたということが考えられます。その後、クラウデオ帝は 5 年後の紀元 54 年に死去し、ユダヤ人退去命令は解除されたので、プリスカとアクラ夫妻もそうですが、再びローマに戻っていたユダヤ人たちもいたのでしょう。それに何と云ってもローマは当時の世界の中心地です。そこを行き来する人たちはたくさんいました。ですからパウロはまだローマに行ったことがなくても、パウロと関わりのあった人がこの時までにはローマに移り住んでいたということがあったでしょうし、またその彼らから聞いたローマの教会についての様々な情報もあったのでしょう。

そんなパウロの挨拶の中で、私たちが日本語で読んでも感じるのは、心のこもった挨拶がなされていることではないでしょうか。なぜそんな親しさがパウロとこれらの人々との間にあったのでしょうか。まず分かるのは、ある人たちはパウロと共に働いた経験があったということです。1 節にケンクレヤにある教会の執事フィベが紹介されています。今日のリストの中でこの人だけはローマの教会の人ではありません。2 節に「この人を歓迎してください」とあることから分かりますように、おそらくパウロはローマに出かける用事があった彼女に、このローマ人への手紙を運んでもらおうとしていたのだと思われます。彼女について 2 節の終わりに「多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた人です。」とあります。また 3 節に、先ほど触れたプリスカとアクラの夫妻が出てきます。この人たちについては 4 節に「自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれた」とあります。また 7 節には「私といっしょに投獄されたことのある」人としてアンドロニコとユニアスが出て来ます。また 9 節に「キリストにあって私たちの同労者であるウルバノ」と出て来ます。これらパウロと共に働いた人たちとの間に親しい感情があったことは容易に理解できます。しかしこのリストにはパウロとの関係が特に記されていない人もたくさんいます。特に 10 節以降がそうです。そこでも多くの人が様々な賞賛の言葉をもって触れられていますが、パウロと直接的なつながりがあったのかどうか、面識があったのかどうか、定かではありません。しかしその彼らも、この挨拶のリストに名があげられています。ではこれらの人々とパウロとの親しい関係を成り立たせていたものは何だったのでしょうか。それは繰り返し「主にあって」とか「キリストにあって」と述べられていますように、お互いが主イエス・キリストにあるということでしょう。なぜある人たちは自分のいのちを危険にさらしてまでもパウロと苦闘を共に

したのでしょうか。このリストにはパウロによって救いに導かれた人も含まれていますが、大多数の人はそうではありません。ですからパウロと一緒にそこまで働かなければならない義理の関係はないのです。しかし彼らがそのようにしたのは、一人一人がキリストの救いを心から感謝していたからでしょう。それぞれがキリストに導かれて自分をささげて歩んでいたのです、ある者たちは結果的にパウロと一緒に場所で労苦することとなった。そしてこの絆はパウロと一緒に働いたことのない人たちとの間にもありました。先にも述べましたように、このリストには直接パウロと労したのではなく、パウロが伝え聞いたクリスチャンたちの名前も含まれていると考えられます。しかしその人たちもイエス・キリストの救いにあずかり、キリストに感謝し、キリストのために歩んでいるという情報をパウロは聞いている。それぞれの詳しい働きぶりはまだ目にしていなくても、それぞれが主を喜び、主のために歩んでいるというニュースを聞いている。それだけで嬉しいし、それだけでお互いが特別な絆で結ばれていることを感じる。それは一言で言えば、互いに神の家族であることを知るがゆえの愛情であり、愛着でしょう。

これはクリスチャンの特権です。私たちは違う土地、違う教会で信仰を持って、他のクリスチャンと出会うとお互いが根本的な一致に生かされていることを知ります。今まで知らなかった人なのに、考えること、感じるものが同じ方向を向いている。もちろん細かい点ではその人の持ち味なり、特徴なりで違うところはあるでしょうけれども、深いところでの共通点がある。普通、他の人とそこまで親しみと安心を感じるまでには相当時間がかかるのに、クリスチャンである人とは、もう何十年も一緒に過ごしてきたかのような関係であると感じる。そしてそれは今だけのことではなく、この人とは将来天国で永遠に共に住むのだと思うと、いよいよ神の家族としての愛着がわく。そういう兄弟姉妹が主に感謝して主に応答して歩んでいるのを見ると、私たちはとても嬉しくなり、また励まされるのです。この世にはない素晴らしい交わりを感じるのです。これは神が造って下さった一致であり、神が与えて下さった交わりです。そこにパウロも、手紙を運ぶフィベも、またローマのクリスチャンたちも生かされ、喜んでいる。そのような神が作り出して下さった美しい一致の祝福がこの挨拶の中に証しされているのではないのでしょうか。

この一致と共に第2に見て行きたいのは多様性です。クリスチャンの一致とは多様性における一致であるということです。このリストにある人々は実にバラエティーに富んでいます。まず目に留まるのは女性の働きです。1節のフィベは女性執事です。3節の

プリスカとアクラ夫妻では、最初のプリスカの方が妻です。6 節のマリヤは「非常に労苦した」と言われています。7 節に出て来るユニアスも女性と思われませんが、そうすると彼女も夫アンドロニコと共に、使徒たちの間で評価される立派な働きをした人であることとなります。また 12 節のツルパナとツルポサ、ペルシスはいずれも女性と思われませんが、彼女たちの働きも称賛されています。13 節にはルポスの母のことが述べられています。その他 15 節にはユリヤ及びネレオの姉妹が出て来ます。27 人中少なくとも 9 人は女性です。このことはまだまだ女性の地位が低かった当時、キリスト教会ではいかに女性たちが大きな働きをしていたかを物語っているのではないのでしょうか。

またこのリストには主人またしもべに相当する人々がいます。10 節のアリストブロはヘロデ・アグリッパ王の兄弟であり、クラウドオ帝の友であったと言われています。また 11 節のナルキソの家とはクラウドオ帝に影響を及ぼした有名な家だったと言われます。その一方、アムプリアト、ウルバノ、ヘルメス、フィロロゴ、ユリアなどは、奴隷に多い名前だったと言われます。またここにはユダヤ人も異邦人も含まれています。7 節や 11 節で「私の同国人」と言われている人、及びプリスカとアクラはパウロと同じユダヤ人。その他は異邦人であったと考えられます。

この多様でありながら一つである教会の姿はどう現わされたのでしょうか。当時の教会は、5 節にあるように、「家の教会」と呼ばれる形態でした。3 世紀頃までは今日の教会堂のようなものは一般的ではなく、信者は比較的大きなスペースを持つ信者の家々で集まりを持っていました。ではそれぞれの家の教会の構成はどのようなものだったのでしょうか。世界的な著名な神学者の一人であるジョン・ストットはこのように問うています。それぞれの家の教会はどんな集まりであったか。男性用の家の教会、女性用の家の教会、あるいは主人たちのための家の教会、奴隷たちのための家の教会、・・・そのように分かれていたのか。私たちは自分と似ている人と一緒に集まりたいと思うものです。同じ年齢、同じ好み、同じ思考パターン、同じ雰囲気の人と礼拝し、交わる方がやりやすい。この手紙で強い人と弱い人の問題を見てきました。ある人は肉を食べるべきではないと主張しましたが、ある人々は何でも食べて良いと主張しました。こういう違う考えを持つ人々と一緒に家に集まるより、別々の集まりにした方が楽です。果たして家の教会はそのように分けられ、アレンジされたのでしょうか。ストットは「私はそうは思わない」と言います。もしそのようにタイプの違う人々が別々の家の教会に分離・隔離されていたなら、どのようにして「お互いに受け入れ合いなさい」というパウロの勧めは

実践され得たでしょうか。パウロは 15 章 6 節で「それは、あなたがたが、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。」と言いましたが、もし文化的に考え方が大きく異なるユダヤ人と異邦人が別々の家の教会に集まることをしていたなら、どのようにして「心を一つに合わせ、声を合わせて」というパウロのメッセージは現実化されるでしょうか。それぞれが自分に合うと思う集会に行き、タイプの違う人を受け入れるという実践はしないでおきながら、それでいてキリストは隔ての壁を打ち壊して下さった！私たちは全体としては一つである！と賛美するのはナンセンスである。ストットは、異種混交の状態であること、色々な種類の人々がそこに混じっていることが教会の本質であると言っています。

私が前にアジア宣教ツアーでフィリピンに行った時に見たことの一つは、お金持ちの教会と貧しい人たちの教会が全く分かれているということでした。日本で見る以上に立派な近代的なビルディングが立ち並ぶすぐその下に、同じ人間がここに生活しているのかと思うようなスラム街がありました。そのどちらにもクリスチャンはいるのですが、それぞれの人々の行く教会は別であり、またそれは別世界。ジーパンにTシャツ、リュックサック姿であった私たち一団は、貧しい人たちの教会にはお邪魔できましたが、お金持ちの教会には訪問することも、中を覗き込むこともできませんでした。アメリカ研修に行った時も、皮膚の色の違いでまだまだ教会が別れている現実があることを聞かされました。しかし問題は外国にばかりあるわけではありません。私たちの教会も今いる自分たちと同じタイプの人間だけを歓迎して、他は歓迎しないという傾向は持っていないでしょうか。好みに合う人だけを受け入れ、あとは知らんぷりということはないでしょうか。その人がキリストにある人なら、あるいはキリストを求めている人なら、それだけで、どんな人でも歓迎し、交わろうとしているでしょうか。もしそうでないなら、私たちは神が導いて下さっているキリストにある一致よりも、私たちの肉による一致、あるいは自分たちの好みによる一致をより高く掲げていることとなります。そのようにキリスト以外のものを上に持って来る時、当然教会はそれによって分断されてしまうのです。

ストットはそれゆえ同種同質の人たちばかり集まっている教会は本質的に欠点のある教会であると言わなければならないと言っています。そして私たちは様々な種類の人々からなる異種混交の教会という本来のあるべき姿に向かって、悔い改めつつ、努力して取り組んで行かなければならないと言っています。ヨハネの黙示録 7 章 9 節には、

天上にある教会が「あらゆる国民、部族、民族、国語」からなる大勢の群集からなっていて、その人々が一つ声で主を賛美する光景が描かれています。私たちは天国ではそのように一つ心で、声を合わせて神を礼拝します。確かに地上にある私たちは完全な状態には達しないのですが、だからと言って今はこれで良いのだと正当化せず、やはり悔い改め、今ここにある時から、やがての天での大礼拝、主にある一つ民の交わりを映し出すものとなるように取り組んで行くべきではないでしょうか。パウロはその促進のために、最後 16 節で「あなたがたは聖なる口づけをもって互いのあいさつをかわしなさい。」と言っています。来週もう一度ここから見たいと思いますが、パウロは私たちがキリストにある一致と交わりを益々確かなものにするように、様々な人々からなる教会が益々一つに結ばれて、この祝福に生きるようにと勧めているのです。

罪のゆえにお互いにバラバラになり、一致しようと思ってもできなかった私たち。心を通わせようと思っても、そうできなかった私たち。しかし神はキリストにあって私たちを一つの交わり、互いに心が通い合う愛の交わりへと導き入れて下さいました。この神による一致を認めて、感謝し、私たちがこれを益々尊ぶことができますように。他の基準を持ち込んで、お互いの関係に分裂を生じさせ、この交わりを破壊する者となりませんように。キリストにある者たちであることに加えて、さらに趣味や考え方が同じ人とはとても付き合いやすいでしょう。しかし神が備えて下さっている祝福は全くタイプの違う人、本来は一致できそうにないタイプの人とも、キリストにあって一つ交わりに歩めるということです。今日の箇所ではパウロはあらゆるタイプの違う人々に対し、私の愛する〇〇によろしく、キリストにある同労者〇〇によろしく、と愛の挨拶を送りました。私たちがまたそのように、神が作り出して下さっている一致の交わりを感謝し、これを尊んで生きることができますように。そしてやがて完全に現れる御国の素晴らしさを指し示し、このキリストにある祝福に人々を招き入れる教会の光栄と使命に歩みたいと思います。